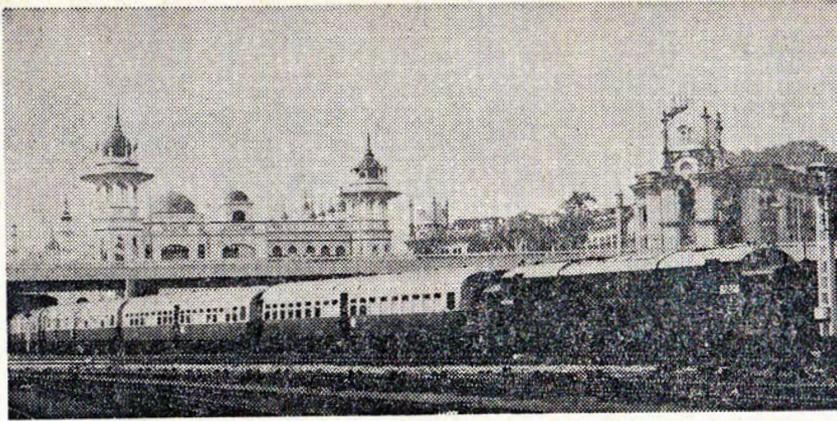


マレー半島縦断記



クアラルンプール駅

マレー半島縦断記

—インドシナ戦後のアジアの現実—

インドシナ戦後のアジアの流動のただなかにあって、アジアの深淵と中ソの影を探り、日本の役割を問う。ソ連・モンゴル・中国縦貫記に次ぐ考察

I マレーシア・タイ国境にて

日頃の生活感覚のなかに国境という意識をもたないわれわれ日本人が、国境をしかも汽車で越えるということは、どんな場合でも、いささかエキサイティングな出来事なのである。そのような行為をいとも容易な日常性としてなし得るまでに成熟したヨーロッパ社会での体験は、私にとっても、いわば想い出の一齣といったものだが、アジアでの経験には、ある種の緊張と摩擦を伴ったなにかが沈澱する。なかでも去る一月上旬、外モンゴルから汽車で中国へ入境したときの諸体験

は、私にとって忘れがたいものであった。今回、私の乗ったマレー鉄道は、一日一回はどこかで脱線するとクアラルンプールでおどかさされたけれども、中蒙鉄道にくらべたならばかにスピードがあり、SLとディーゼルの力の差には歴然たるものがあつた。それに、なにしろ片や厳寒の内陸、片や炎熱の半島という比較が同じアジアでもあまりにも対極的なので、いずれも中国とその影をさまざまな角度と位置において確かめようとする私の旅行目標の共通性への自覚をかえって促される。

こうした臨場感のうちに、私の汽車がマレ

中 嶋 嶺 雄

(東京外国語大学助教授・中国研究)

I シア・タイ国境のマレーシア側最後の駅バダンベサルに着いたのは、去る九月十五日の午前十一時半であつた。ここバダンベサルは、マレーシア最北端のペリス州東北辺に位置する国境の町である。このあたりは中部マレーとは異なり、西海岸に近いだけになりの平坦地で視野も開けている。それなのに、ここにもいわゆる共産ゲリラの活動があつたのかと、思わずあたり一帯の地勢を確認せずにはいられなかつた。バダンベサル近くのリンバマスでマラヤ共産党のML派による貨物列車爆破事件があつたのは去る二月十八日のことであり、その後もバダンベサル

一帯で爆弾事件が頻発した。もともと、マレーシア・ゲリラの活動は、インドシナ戦争終結後、とくに最近にいたってますます激化しており、私が国境の町に到着するまえに滞在したペラ州の州都イポー周辺やケダ州のパターワース(インド洋に浮かぶ小香港とも思われる有名な観光地)ヘナンの対岸、ブキト・メルタジャム、ニボン・テバルの各県は、私が滞留したその日に新たに戒厳令の対象地域になつた。

それだけに、国境を無事に通過し得るものかどうか一抹の不安がなかつたわけではないが、実際には、なんら異常なくタイへ入境し、さらに二日を要してマレー半島を北上、シンガポール駅を出発してから一週間後に、一、二、三等のすべての車輜を乗りついでバンコクに到着したのである。

国境は、このように平穩無事であつたが、もとよりまったくハプニングがなかつたわけではない。いかにもマレーシア的なハプニングに出会つたのである。

車中に入り込んできたマレーシア政府の出入国管理官は、私のパスポートに目を通すと、「ちょっと問題がある」という。一室お

いて隣のキャビンに乗っていた人の好きそうなフランス人老夫婦は、いかにも東南アジアの風光に魅せられたかのように、嬉々として最後尾のデッキから写真を撮りまくっていたのに、おそらく航空便の旅行と同じに思つて、査証を事前に取得していなかつたのであろう。このバダンベサルで降ろされてしまつた。私もここで降ろされてしまつたら、クアラルンプールまで一昼夜をかけて戻らなくてはならない。管理官に驚いて確かめると、シンガポールからジョホール海峡を越えた地点、つまりジョホール・バールで入国印を押すのだが、その押印が一つ足りない、という。で、「あなたは、ジョホール・バールまで戻ることができるか」というのだ。つまり、私の旅行を五日間逆戻りさせることができるかというのである。冗談ではない。第一、入国査証はマレーシアもタイも事前にとつてあるし、実際にはシンガポール駅のプラットフォーム・ホームにマレーシアの出入国管理官がいて、そこで入国印は押してあるはずである。ただ、最近の治安情勢を反映してか、荷物検査で、香港で買った、「ソ修社会帝国主



マレーシアのマーケット

に中国語のできない不思議さに慣れる時間を要するのだが、考えてみると、一九六九年の凄惨な人種暴動（五・一二暴動）以来、強力にすすめられているマレー化政策（「ブミブトラ」〔土着の民政策〕が始まってからすでに久しいのだから、このような現象が目立つのもまた当然であろう。華人たちは、やがて母語を失うのではないかという危機感に立って、一部では〈幫〉や〈公会〉の私立学校が華語教育に力を入れているが、やはり時勢には抗し得ないようだ。ここに見られる言語的現実、国境を越えてタイに入ると、年長のタイ人のなかに顔付きは典型的なタイ人であっても意外に中国語を話せる人が多いのを発見することと対照的である。

ところで、華人たちはマレー化政策に強い不満をもちながらも、だからといって、華人が主体のマラヤ共産党に共鳴しているわけではない。むしろ、マラヤ共産党の活動の激化がこれ以上の華人抑圧につながることをおそれ、一様に前途を悲観している。マラヤ共産党は、昨年末以来、ケダ州のパーリンなどで起こった零細ゴム園主やゴム園農民の対政府示威運動とそれに呼応したマラヤ大学生な

どの運動とも一体化できなかったし、この農民運動が人種対立の壁を越えてむしろマレー人貧農層を中心に自然発生的に組織されたという画期的な事態にもなんら対応し得ず、もっぱら大衆的基盤を欠いたゲリラ活動に集中して今日にいたっているのである。皮肉にも、ここにラザク政権にとっての救いがあるといわなければならない。

Ⅲ アジアの流動と再編

私は東南アジアを訪れるとき、香港の海光出版社版の『東南亜新掛図』をいっしょに携行するようになった。この地図は、日本製の東南アジア地図とはちがって、南シナ海を中心に東南アジアの全域をカバーするかたちにくらわれている。つまり、この地図を見ていると、いわゆる東南アジアとは、アジアの内海・南シナ海の周縁部を連ねた円環であることがわかる。

私は、今回の旅行中、使い古したこの地図をしばしば眺めて、そのように南シナ海を取りまくアジア・太平洋地域には、この夏、実に様々な事件が起こったことを想った。

南太平洋の一隅、ポルトガル領チモールの

義の軍事進出」といった類の小銃やロケットなどの写真が出ている小冊子類を押収されはしたが、それ以外に問題があるうはずはない。と思っていると、「上司にとりついで善処してやるから、うまくいったらいくらくれるか」という。ここでトラブルを起こしてもいい、ついでにわかれる通りにうなずいて待っている、しばらくして彼は、にこにこして戻ってきて、「すべてOKだ」といい、そのかわり日本円か米ドルでコミッションをくれ、という。私はすでにクアラルンプールまでの車中で、親しくなった車掌に最後には金を歩いた経験もあるので、このような手口にはある程度馴れていたつもりだが、ついに国境では五ドルをはずむ羽目になってしまった。通関税だと思っておきらめたのである。

出入国管理官が人を偽って賄賂を要求する

——この小さな出来事が象徴するマレーシア社会の基底は、重々しく淀んだアジアの深淵である。このような現象は、東南アジアに共通の症候だとして、たとえば経済学者の飯田経夫氏も鋭く問題を指摘していたが、「援助する国される国」、この淀んだ深淵から離脱す

ることなくして、これら諸国の「離陸」はあり得ないであろう。

Ⅱ 淀んだ現実

こうして汽車旅行をしてみると、アジアの重々しい現実を肌で感じてつい考え込んでしまふのだが、クアラルンプールからイポーまでは三等車だったためか、マレー半島の夏の暑さにことさら身を賣められた。中部マレーはジャングルも深く、荒地や河川が錯綜しているうえに、山岳も険しい。まさに、東南アジアのゲリラ活動と地政学との関連を実感させずにはおかない。

一方、ここに住む民衆の意憤と民度の低さ、潜在的失業人口の大きさなどをじかに見せつけられると、ここには国家が存在するのかもしれない疑問にとりつかれる。マレー人と中国人との複合民族国家として、その国民形成と民族統合を目指すマレーシアを概念的に認識することは容易だが、それだけではマレー半島の農山村に存在するこの泥々しくも空洞とした現実が抜け落ちてしまう。そもそも、こういう社会を背負っていながら、一方でたとえはラザク首相はASEAN諸国の外

交的リーダーたらんとして非同盟外交を華々しく提唱しているのだが、その高邁な理念とこの国のなかで早急に解決しなければならぬ症候群とのギャップがあまりにも大きすぎて、これではラザク首相の非同盟外交も、畢竟、彼自身の威信の増大と保身のためのものでしかないのではないかと、地につかないことを確認せざるを得なくなる。国民形成とか民族統合とかいっても、社会の基底に蠢く民衆の側に呆たして国家とか民族とかの自覚的な意識があるのかどうかさえ疑わざるを得ない場面にも多く出くわすのであった。

車中で、連日のゲリラ活動が一面トップに大きな見出しで載っている新聞を読んでいると、前の座席のマレーシア華人の青年が空いた英字紙を見せってくれという。相手が中国人なので、気をきかせて華字紙の方も差し出すと中国語は読めない、という。マレーシア一帯のこのような中国語のできない二世、三世の華人たちを、専門的には僑生(Baba)と呼ぶが、今回マレー半島を旅していて、このような青少年が目立って多くなっていることに驚いた。そんなとき、思わず相手の顔のぞきこんでしまった。どう見ても中国人なの

凄惨な内戦、バブア・ニューギニアの独立とその一部（ブーゲンビルなど）の分離独立への動き、ボルネオ（東マレーシア）のサバ州の独裁者タン・ムスタファの反逆劇（分離独立への動き）とそのいさか喜劇的かこのサバのムスタファが武器援助などの影の黒幕だともいわれ、サバとはスルー諸島を介して連なるフィリピンのミンダナオ島における回教ゲリラ事件（日本人女性人質および未だ丸事件）、マレーシアの首都クアラルンプールにまで進出した共産ゲリラ事件やタイ・マレーシア国境一帯でのゲリラ活動の激化、ククリット「民主主義」政権下タイにおける左右の小反乱と東部タイおよび東北タイにおけるゲリラ活動の浸透、ブノンペン陥落後約半年にして実現したシアヌーク殿下の帰還と同殿下の不安定な地位の露見、南ヴェトナムにおける「ハノイ化」の進行、ハノイと北京との亀裂の増幅、蔣経国政権の台湾における痛烈な反政府言論の表出（『台湾政論』の創刊）など、南シナ海を中心とする円環を二巡して生起しつつあるこれらの事件の連鎖には、やはり注目しないわけにはゆかないであろう。

しかも、今日の東南アジア社会には、茫洋

ANに話題が集中することはしばしばあっても、SEATOの解消は当のバンコクでもさしたるニュースにさえならなかった。

かつて一九五四年に、アイゼンハワー米大統領が「ドミノの駒」の譬えを語ったその同じ年に設立されたSEATOは、いわゆる冷戦時代のその形骸さえも消して消去去ろうとしていたのだが、SEATOに象徴されるアメリカの反共グローバリズムの終焉のあと今日のアジアの方向を、ヴェトナム戦争型の解放諸勢力の勝利に賭けて「歴史の流れ」と一括するには、アジアの状況はあまりにも複雑で流動的でありすぎる。「北部における社会主義革命と南部における人民民族民主革命」（レ・ジュアン・ヴェトナム労働党第一書記）という二段階革命戦略が、国際的危機の連動性が叫ばれる今日の国際環境のなかで、アメリカのアジア政策の根本的転換を背景にして一挙に達成されただけに、その衝撃はきわめて大きかったけれども、アジアの三〇年戦争といわれたような長期の革命戦争のうちにヴェトナムではようやくその第一段階が達成されたのであって、反面、このような歴史的プロセスをアジア全域が共有しているわけでは

とした南洋社会特有の沈滞と無気力と悠長な忍耐力とがその日暮しの快楽への明るい衝動とともに陰陽織りませて混在していることも事実であって、それだけに彼らの日常生活のバランスがどこかで崩れたとき、その崩壊の衝撃が狂信的な暴力行動につながりかねない恐ろしさを感じさせもする。東南アジアの地域社会でしばしばもつとも凄惨な集団暴力が発生すること、風土的・社会的背景を無視するわけにはゆかないであろう。

いずれにせよ、右に列挙した一連の事件の連鎖は、インドシナ戦後のアジア情勢の再編過程に内在する地方的な、ないしは地域的な衝動のあらわれであり、それらは、インドシナ戦後のアジアは、いまだ新しい国際秩序が形成されていない状況において噴出したものであるだけに、新しいアジアの将来の方向に影響を与えずにはおかないであろう。

同時に、これらの事件を一つ一つとつてみると、その多くは、積年の歴史的背景に根ざすものであることに気がつく。たとえば、中国・ヴェトナム間の抗争が中国と周辺諸国との千年単位の伝統的な世界秩序の「遺産」であったり、フィリピンの回教徒反乱が西欧の

ない。ここに、アジアが、その流動的な情勢にもかかわらず決して一様の方向のみをたどるのではなく、その多様性のゆえにかえって変動の振幅も大きいというアジアの流動と再編のダイナミズムの源泉があるような気がする。この点からしても、「ドミノ理論」には、

アジアをきわめて均質なモノトニーとして見てしまおうという陥穽があるのでインドシナ戦後の行方が注目されているタイも、マレーシアも、その不安的な流動性にもかかわらず、インドシナ諸国と同じ航跡をたどるとみなすわけにはゆかないであろう。今日、東南アジアで最大の軍事力を有する南北ヴェトナムが（タイとの軍事力比は七対一だといわれる）積極的な「革命の輸出」をおこなう場合は別として——その可能性は小さいであろう——、タイ全土が共産化するためには、バンコクのような都市での共産化が必要であろうし、マレーシアの場合は、マレー人農民層との密着が必要であって、それまでにはまだまだ時間がかかるし、一方、タイもマレーシアもチュー政権の敗北の教訓をあまりにも身近に見て学んでいる。従って、今後とも激しく揺れるであろうアジアの流動と再編の将来を、ただただ

フィリピン上陸以来の宗教的抗争の重みをひきずっていたり、タイを含むマレー半島の共産ゲリラが抗英闘争以来の伝統を保有していたり、いずれもアジアの歴史の裏側に隠れていたもう一つのアジア史を形成していたドラマであったことがわかる。そのような個々の事件が、インドシナ戦争の終結によってアジアの国際政治の従来の枠組みが大きく崩れたのち、それにかわる新しい国際秩序がいまだに未形成である状況において一挙に表出したところに、大げさにいえば世界的な意味があるのであり、少なくとも今目的ないしは同時代的な意味があるのである。インドシナ戦争の終結によって、アジアにおけるグロバルな国際政治の時代は一期を画し、これからのアジアは、より地域的ないしは地方的な問題をめぐって内部で流動し、角逐するものと思われるだけに、右の一連の事件の連鎖を無視することはできないであろう。

私がマレー半島を縦貫してバンコクへ到着した直後に、バンコクに本拠を置く東南アジア条約機構SEATOの解消が再確認された。今日、アジアの地域主義的政治・経済統合の機構としての東南アジア諸国連合ASEANに「共産化」という座標軸にのみとらわれて考へること自体から訣別しないかぎり、アジアの激動とその深淵を正しく認識し得ないであろう。

IV 揺れるアジアの中国像

私の今回の調査旅行は、先にもちよつと触れたように「中国の影」と中ソ対立の波紋とがアジア諸国にどのように投ぜられているかをテーマに、インドシナ戦後の変化がもつとも注目されるマレー半島諸国、つまりシンガポール、マレーシア、タイの三カ国を訪問し、シンガポールからバンコクまでは、約二〇〇〇キロの行程を二つの国境を越えて汽車旅行するのが目的であった。私にとって、今回の旅行は、去る一月上旬にモンゴルのウランバートルから北京まで約一八〇〇〇キロの行程を、中ソ関係の現状をたずねつつ、北側から中国をのぞいてみようとするゴビの砂漠の中蒙国境を越えて汽車旅行した体験（拙稿「モスクワ・ウランバートル・北京」、『中央公論』一九七五年三月号参照）と対称的に「中国の形」をいわば南側から見つめようとする興味にも支えられていた。



マレーシアのオフィス街

を中国の政策と結びつけて短絡的に見ることでできるかどうかは疑問である。「マラヤ革命の声」放送もしばしば認めているようにマラヤ共産党には、抗英民族解放闘争以来の伝説的指導者、陳平書記長以下の党中央委員会のコントロール下でない革命派やML派の少数過激派が派生しているし、こうした問題がないと仮定しても、今日の事態にかんしては、インドシナ情勢の変化こそ、直接に影響しているようであり、地理的にもマレー半島と中国大陸とのあいだに「革命インドシナ」が誕生したことの意味は絶大である。しかも、中国とハノイのあいだの「すき間風」は、たんに非常事態宣言を発したインドのガジンジ政権への中ソの正反対の評価をまえに、あえてハノイがモスクワに同調したという状況証拠や去る三月中旬の北京における江青講話（毛沢東夫人江青の外交幹部・領事級以上に対する講話）に含まれているハノイへの辛辣な「あてこすり」といった材料からのみならず、いまやあらゆる面から強まってきている（この問題について詳しくは、拙稿「インドシナをめぐる中ソ対立」、「国際問題」一九七五年十月号参照。それだけに、最近の『水滸伝』批

判にも含意されている中国共産党内部の路線闘争との関連など多くの背景があるとはいえ、中国共産党がインドシナ情勢の急変以後、マラヤ共産党をはじめとするアジアの現地共産党への声援を再開したことのひとつも大きな要因は、なによりもまず、ハノイへの北京の対抗意識に求めて間違いないであろう。それほどもで、アジアの共産主義勢力にとつて、ヴェトナム戦勝後のハノイは、大きな存在になりつつあるといえよう。私がマレーシアのペラ州州都イポーで会った華字紙の記者は、ついその日までタイ南部国境地帯を歩いてきたばかりであったが、彼は「取材はできて表現できない」苛立ちを訴えつつ、ヴェトナムに残されたアメリカの武器がタイ国境を経由してマラヤ共産党に流れていると断言し、地図を広げてそのルートを示したほどだった。もとより、このような問題の真偽は確かめようがないにしても、以上のような状況のなかにインドシナ戦後の「中国の影」の新たな輪郭が複雑に屈折して投影されていることはいうまでもない。

中国問題にたいするこのような反応もタイでは雰囲気が大きくちがっている。この国の

まず「中国の影」についてであるが、同じASEAN諸国とはいっても、対中関係や中国像には、あまりにも大きなギャップが存在する。このギャップの大きさは、それぞれの内政の今日的な状況の反映であると同時に、インドシナ戦後のアジア情勢、もつと直接的には自国の安全の（Security）にたいする認識状況の反映でもある。

シンガポールでは、南洋大学の旧知ヤリ・クアンユー首相のブレインをつとめる学者とも話してみたが、いわゆるシンガポリアンとしての国民形成を目指しつつ、その華人社会を近代的な都市国家として発展させつつあるこの国は、マレーシア（七四年五月）、フィリピン（七五年六月）、タイ（同七月）とつづいたASEAN諸国の対中国交樹立にたいしても、きわめてクールに事態をながめている。むしろ内心では、これら三国は対中国交正常化によって、逆にゲリラ勢力が活発化するなど国内不安が増大しているのではないかとみなしつつ、対中国交のテール・エンドをインドネシアと競うことに賭けているかのようであった。中国問題にたいするこの国のこのような冷静さは、もしもこの問題で過熱した

ら人口の八〇パーセント以上が華人であるこの国の存立の基礎が脅かされることへの本能的な対応の姿勢であろうし、リー・クアンユー首相の鋭い外交感覚とそのリーダーシップによるところが大きいであろうが、しかし、このことは、シンガポールがインドシナ戦後のアジア情勢に危機意識を抱いていないということではない。旧知の蕭慶威・南洋大学教授は、開口一番、「今日のアジアで長期的展望とは一年かぎりの展望を意味します」とアジアの情勢展開のテンポの早さを熱っぽく語ったが、同時に「ゴドミノ理論」もあるが「マジョリジャン理論」も考えられる」といつて、要するに勝つこともあれば負けることもある状況を興味深く指摘していた。アジア・太平洋地域の十字路に位置する海峽都市国家シンガポールは、中国への対応よりも、今後はむしろインドネシアを介して北はフィリピン、台湾、日本、南はオーストラリア、ニュージーランドへ延びる太平洋地域との繋がりをより重視してゆくであろう。中国問題での冷静さの背景には、このような志向があるような気もする。

一方、ASEAN諸国の先頭に立って対中

国交を実現したマレーシアでは、「中国の影」がふたたび大きな問題になりつつある。強引にマレーシア化政策をすすめるラザク政権への不満を内蔵している華人のあいだに（彼らは、マレーシア人口の三四・一パーセントが中国人だという政府の統計へ一九七〇年八月二十四日付）にたいしても不信感を抱いており、人口の半数もしくはそれ以上が中国人だと主張する者さえある。かえって、対中正常化以後のゲリラ活動激化への不安が高まり、無国籍中国人問題にしてもならん解決していかないではないかと訝っている。それだけに、ラザク首相は、去る四月二十九日のマラヤ共産党四十五周年記念への中国共産党からの祝電（四月三十日付『人民日報』はこの祝電を一面トップで報じた）にも神経をとがらせ、「対中国交時の約束とは違うではないか」と中国に抗議したことが明らかになった（六月二十二日）が、中国側は、クアラルンプールの中国大使館筋も、「党と党との関係と政府間の関係とのちがいがい」だとしてわりきっていて、ラザク政権の苦惱は小さくない。

ところで、すでに見たように、マレーシアの共産ゲリラはこのところきわめて活発だが、しかしこれら一連の「ゲリラ活動の激化

りだったから、この三カ月の間にさえ、これまで状況が変化しているのである。もとより、イギリス香港政庁は、香港が中ソ抗争の場になることには極度に警戒的であり、ソ連船が入港しても、最近では乗員の陸上さえ許さないほどだが、中国系紙は、それでもソ連はあらゆる手を用いて香港への浸透工作を企図していると非難してやまない。

シンガポールは、リー・クアンユー首相の政策によって「中国の影」にたいする厳しい抑制をつづけ、その政策を維持するためにソ連の過度の活動を認めない立場だが、アジア・太平洋地域のローカルな紛争にさえ中ソ抗争の波紋が投ぜられかねない今日の事態にたいしても警戒的である。たとえば、チモールの内乱にさえ、中ソ対立の影を見る推測さえ可能なのであり、左派の独立革命戦線(FRETEILIN)は毛沢東主義者が中核となり、ポルトガルからの漸進的独立を唱えた民主同盟(UDT)はソ連共産党に近いポルトガル共産党の影響下にあって、これにインドネシア派の人民民主協会(APODETE)が少数派ながら組み合わさっているという内乱の絵解きは、ある意味で論理にかなっている。少

なくとも、チモール内乱の長期化が中ソ抗争に結びつき、この小島にも中ソの覇権争いが及んでくるかもしれないという国際環境は現在存在しているのであって、とりわけソ連の海洋戦略上の関心は高いであろう。海洋戦略といえば、マレーシアのインド洋への出口の一つであるバタウィース港には、私の滞在中、ソ連の大型貨物船が碇泊していたが、中国は、アジア各地へこうしたソ連船の入港をたんなる通商目的のものとはみなしていない。

話をタイに戻すと、バンコクにはすでにソ連大使館が開設されているだけに、中国ブームに沸いたタイでの中ソ抗争は熾烈である。バンコクの英字紙『ザ・ネーション』の最近の社説(九月二十三日付社説「ソ連がやって来る」は、問題が刺戟的であるためか、わざわざ香港の『ファー・イースタン・エコノミック・レビュー』誌の数字を引用する。かたして、二百二十三名ものソ連市民が目下バンコクに居住している事実とその活動を紹介していたが、こうしたソ連の工作にかんしては、去る七月二十二日にタイ共産党の機関放送「タイ人民の声」が、タイにおけるソ連の

「スパイ・転覆・破壊活動、内政干渉、ぎまん宣伝」などを詳細に報じて非難し、「この連中はタイの軍事・外交情報を収集するほか、南部国境一帯に赴いて偵察活動に従事し、マレー半島とインド洋地域に勢力を拡げられるように、その拠点を探ろうとしている」と激しく糾弾していた(『人民日報』一九七五年七月二十五日)。

実際、タイにおけるソ連の工作は、報道以上に華々しく、とくにバンコクとチェンマイを拠点に、有力タイ語紙や大学関係に資金を出したり、タイの労働運動指導者をパリに「命中」のタイ進歩勢力の元老的存在、ブリディー元首相を介してソ連に招いたりしていることがほゞ明らかになっている。

こうして見てくると、アジアにおける中ソ抗争は、従来の論争や対立の域を超えて、まさにしごをけずる浸透合戦、工作合戦にまでエスカレートしている状況が明らかである。もとより、このような事態をもたらした背景には、全欧安保会議を「危険会議」だとして非難した中国の主張をまつまでもなく、ヨーロッパの安定を基礎にしたソ連の積極的なアジア進出への企図があるであろうし、中

大部分の人びとには中国人の血が流れているにもかかわらず、これまでタイにとって中華人民共和国はタブーであり、禁断の国であったのに、一昨年の十月政変以来徐々に状況が変化し、今回の国交正常化でその禁が一举に解かれたあとだけに、対中感情はきわめてよく、対中国交の成果がしきりに喧伝されて、政府はそれをククリット政権の外交的功績として誇示しようとしている。ククリット首相の中国問題のブレインとして同首相と一緒に訪中したチュラロンコン大学の少壮学者は、北京で買った壁掛けを背に流暢な北京語で中国の印象を、たとえば中国側が今日のタイでは失われてしまった典型的なタイ料理を中国の少数民族・雲南タイ族に求めて招宴してくれたが、彼にとって今回の訪中はまさに「天竺国」への旅を現実のものとしたといった感じであるように思われた。またタイでは数少ない国際政治学者の一人は、「ハノイからの脅威に備えるためにこそ中国との関係を強化しようとしているのではないか」という私の質問を渋々肯定していたが、ともかくタイの中国観は今日のアジアでもっとも北京に

共鳴的に思われるほど変化している。そのようなタイにとって中国は世界に冠たる目覚しい中国でなくてはならない。街には国交正常化のときのククリット首相と毛沢東主席の肖像が大きな映画の看板になって立っていたが、その毛沢東はどう見ても三、四十年代の若々しい毛沢東であった。こうしてタイの中国ブームは沸騰点に達したその直後であったが、このムードが冷却するまでには、中国接近への軍内部からの批判といったものは不十分であり、タウィット農相らの訪中や古典舞踊団の訪中を中国側が断るといった九月下旬の事件のようなハブニングが、さらにいくつか重ならねばならないであろう。そのようなタイにとって、最大の不安は、中国との関係の強化がハノイの冷淡な態度をささっていることである。中国との国交のちに当然実現しようとした最大の外交目標であるヴェトナムとの国交交渉は中断してしまい、そのかわりに、中国ブームと競合的にソ連の浸透工作がきわめて顕著になってきている。この事実はずいぶん、大きな誤算であり、あるいは対中国交といっても、ほどの程度

Peking Review を読む程度というこの国の中国にたいするナイーブな対応の代償であるのかもしれない。

V 東南アジアの中ソ抗争

いま、ソ連の浸透工作といったが、今日のアジアをめぐる中ソ抗争の熾烈化は想像以上のものである。この点では、中国があらゆる意味で東南アジアに潜在的な地盤をもっているのにたいし、ソ連にはそれが欠如しているだけに、ソ連のアジア進出は、いきおい行動的ないしは拡張主義的にならざるを得ない。そこに「アジア集団安保」という理念がかぶされているだけに、かえって複雑な波紋と疑心をいざなう。

私は今回の旅行の途次、先に香港へ立ち寄ったが、商務印書館や三聯書店といった中国系の公認書店のみならず、香港特有の露天の新聞雑誌売場でも、ソ連のアジア進出にかんする軍事・戦略物の出版があふれ、たとえば盤古出版社編著『蘇聯問題文集』(一九七五年九月刊)のように、「ソ修社会帝国主義」の罪状集といった本も出まわっていることはいささか驚いた。私にとって香港は三カ月ぶ

国はまさに「前門の狼を拒み、後門の虎を防ぐ」(『人民日報』一九七五年七月二十九日付の任谷平署名論文)ことに当面全力をあげるであろう。しかも、私自身がみずからの旅行体験によっても確かめ得たように(前掲、拙稿「モスクワ・ウランバートル・北京」参照)、中ソ国境の軍事緊張は、すでに以前の状況とは異なっており、中ソ戦争の可能性を中ソ双方に暗黙のうち確認させてしまった状況にあり、その余力はアジア全域に拡がり、中ソ対立はよりグローバルな国際的対立となつて、まさに中ソ冷戦とみなし得る状況を呈しているのである。この場合、すでに見たように、ハノイの威信と影響力の増大は、いやがらなくても中ソ抗争を増幅させる。今日、広範なゲリラ活動の根拠地となつている東北タイの共産勢力は、先に引用した「タイ人民の声」にも見られるように、これまで一般には中国の影響下にあるものとみなされてきたが、いまや、中国に近い北部タイはともかく、東部タイの共産ゲリラは明らかにハノイの影響下に入つていくようであり、このようなハノイの背景には「ソ連の影」がちらつくだけに中国の苛立ちが激しく、いきおい中ソ抗争は激化しつ

われはぜひ日本から物を買いたいし、日本にも買ってもらいたい。戦争が勝利するまではソ連の経済・軍事援助にたよらざるを得なかったが、これ以上ソ連にはたよりたくない。一方、中国にはもっと警戒的にならざるを得ない。この点、日本とはコマージュルベースで取引きできるので安心だ」との趣旨の説明を受けたことを聴取した。このハノイの声も、やはり本音だと思ふ。それだけに去る十月十一日の在ハノイ日本大使館開設の意味は大きい。今日のアジアの新しい流動のなかで、日本は七〇年代前半のように、アジアの問題現ないしは現状打破勢力であるのではなく、むしろアジアの安定要因として再評価されはじめていのである。そのような安定勢力としての真価がいよいよ本格的に問われよう

あるのである。ここにも、インドシナ戦後のアジアの新しい現実がその未定型の姿を露出している。

VI 「日本再評価」

このようなアジアの新しい現実のなかで、日本にたいする評価ないしは対日イメージが大きく旋回しはじめていることに私は気がついていた。周知のように、六〇年代の高度経済成長を背景に肥大化した経済大国日本は、七〇年代初頭、東南アジアへ一斉に「流出」して日本のオーバードレゼンズと、国際接触における厚顔無恥を露呈し、日本のアジア進出への激しい批判が沸き上がったのであった。とくに、中国が鼓吹した「日本軍国主義」像と東南アジアの反日感情とが結んで一つの潮流となったことの意味を軽視することはできない。

こうした対日批判の激昂はつい先日のことであつたのだが、今日、状況は大きく変わっている。たとえば、去る七月、タイのチャットチャイ外相は、バンコクを訪れた民社党の春日委員長にたいし、「もし日本がASEAN 諸国に武器援助を行なってくれるならば、A

SEANの安定は一層増すであろう」(バンコク、七月二十八日、水藤共同特派員電)と述べて、われわれを驚かせたことがある。今日の日本にその実行可能性はあろうはずもないが、「日本軍国主義」を警戒し、日本の経済進出を批判してきた東南アジアからの新しい対日評価として、このチャットチャイ発言を注目しないわけにはゆかない。チャットチャイ外相は、この九月中旬に日本を訪れて、日本の再投資を要請する一方、右の発言については、これを打ち消すかのようなことを述べたが、私自身がバンコクでチャットチャイ・春日会談の通訳者から聞いたところでも、やはりそのような発言をしたとのことであり、むしろ民社党という少数野党の指導者との会談であるので、つい本音を吐いたのだとも思われる。ともかく、タイは一連の「アメリカ離れ」を勇しく宣言したものの、自国の安全保障のために武器が必要である点に変わりもなく、一方、中ソ抗争は激化するばかりとなつてみて、日本との関係を見直さざるを得なかったであろう。

しているとき、ふたたびアジアの期待を裏切ることになることが絶対にあつてはならない。思えば、このような対日評価の旋回は、石油危機以来の日本経済の縮小傾向や日本の側の対外態度にかんする一定の抑制などが一方の原因になつているとはいえ、多分に外在的要因によるものである。それだけに、対日再評価を甘く受けながしてはならないのであつて、先のチャットチャイ発言に見られるように、自己の生存のためには右手を出したり左手を出したり、いわば最大限の知恵を働かせて生存の戦略を固めてゆかねばならない。アジア諸国の厳しい現実をわれわれ自らの課題として包摂すべきであらう。その際、われわれは、バイの分け前をめぐるギブ・アンド・テークの尺度のなかでその割合の配分の

みを考え直せばよいという安易な対応の態度を止揚すべきであらうし、アジアの錯綜した現実とその淀んだ深淵をよそに、観念的に階級闘争に賭けたり、「歴史の流れ」にすべてを託したりする遊戯と自己満足を許すわけにもゆかない。いたずらに加害者意識にとりつかれて自虐的・告発的になることからも、また、都市文明へのアジアの挑戦といつた、すでに陳腐化した単純な認識からも、なんら生産的な結論は出てこないからである。アジアにたいする画一的な認識から自己を解きほぐし、アジアの現実の深淵とあの南洋社会特有の屈託のない明るさとの混在をありのままに受容しつつ、われわれのアジア認識にリアリティを獲得すること、この一点だけでも、さしあつての要請になるであらう。

A・トインビー著

桑原武夫・樋口謹一 橋本峰雄・多田道太郎 訳

図説 歴史の研究

挑戦と応答を重ねつつ生滅する人類諸文明の総合世界史
トインビー自身が世紀の名著を豊富多彩な図版を利用して全一巻に濃縮

カラー図版は英国で印刷、欧州各国同時翻訳の図説決定版

本書は、トインビー博士自身が主著「歴史の研究」の内容を全一巻に集約し、50年にわたるライフワークの全体系を再編加筆し、後世に遺す決定版とした作品である。

カラー90点、モノクロ400点余の、全世界から蒐集された貴重な図版は、博士自身が選択し、本文叙述に沿って説明を加え、人類文明5000年の壮大なドラマを、読者の眼前に、鮮やかに魅了させ、著者のユニークな歴史考察の内幕に誘い入れていく。

体裁 B4変形判(284mm×228mm)
上製・クロス装・ケース入り
総ページ数680頁
本文 9ポ明朝体2段構組

好評発売中
定価18,000円

部数に限りがありますので、お早めに書店へお申し込み下さい。

学研 学習研究社

〒145 東京都大田区上池台4の40の5
TEL: 東京(03)720-1111(大代表)